

都市河川のアユ復活に思う(23.7.1)

市民ボランティアネットワーク「石津川に鮎を」

船本 浩路

日本の都市部にある大河川はもとより中小の河川も、一時は水質汚濁がひどく、多くの流域住民はかつてのような清流には戻らないだろうという諦め感を持っていたと思う。ところが、工場排水規制が強化され、生活排水対策も進み、公共下水道が普及するにつれて、河川の水質改善の事例が全国の各地で報告されるようになった。事実、多くの川で水質は一定改善されてきた。しかし、改善成果を BOD や COD という専門的な水質評価の尺度で説明するものであるから一般の人にはなかなか水質の改善が実感できず、なにか腑に落ちないところもあった。

川が蘇ったことをわかりやすく紹介したテレビ番組が平成 15 年に NHK で放映された。かつては汚れがひどく上水道の水源として取水停止にまで至った東京の大河川、多摩川にアユが 100 万匹も遡上するようになったという内容のものであった。アユの生態と復活プロセスを映像で紹介したことで、多摩川を直接知らない人までも良くなったのだと認識したことと思う。アユは川とその周辺海域をダイナミックに利用するために、その復活には流域全体での河川環境の改善が求められる。それ故に『アユの復活』は最もわかりやすい清流復活の証しとなる。

『アユの復活』は多摩川に少し遅れて大阪の淀川でも始まった。そして遂にわが町、堺の大和川までに及んだ。堺生まれ、堺育ちの私は大和川に少なからず縁がある。少年期に父親に連れられて伝馬船を利用しての河口でのハゼ釣りや水泳をした記憶が残っている。そのころは随分きれいであった。汚れがひどかった公害時代の後半に堺市水道局の浅香山浄水場に勤務した。大和川の汚れが浄水処理の限界に達したために昭和 53 年に取水停止に追い込まれた。それは水道技術者には非常に悔しい出来事でもあった。取水再開を願って河川の汚濁防止対策や水質調査を継続して実施したが、水質汚濁は止むことはなかった。もうこれから先、取水は無理だという大きな諦め感が職場全体に漂っていた。

平成 16 年に市民団体によるアユの生息確認に関する記事が新聞の一面を飾った。53 年の取水停止から約 26 年目の出来事であった。これをきっかけに河川管理者（大和川河川事務所）もアユの生息調査を開始し、平成 18 年には流下仔魚（孵化直後のアユ）、19 年には産卵場を確認し、復活（再生産）していることを発表した。そのためか「水辺の楽校」などの市民活動にも勢いがついたと聞いている。そして、依然として汚濁ワーストワンという暗いイメージがあるものの、川に対する市民の見る目も確実に変わってきたような気がする。しかし、

真の清流復活はこれからである。再生産はされているが淀川と同様に遡上数は多摩川よりワンオーダー低いと聞いている。水質を始め、まだまだ多くの課題が山積しているのだと思う。

私の所属する市民ボランティアネットワーク「石津川に鮎を」は平成 16 年に結成された。アユをシンボルとして、人々に身近な川を取り戻そうと、堺市の母なる川、石津川水系を対象として河川環境改善活動を行っている団体・個人の緩やかなネットワーク組織である（HP 参考）。活動場所である石津川は流路延長がたかだか 13km の小河川である。汚濁が進み、直線化に、三面張りという典型的な人工化河川でもある。河川環境はお世辞にも良いとは言えないが、街中を縦断して流れること



石津川の稚アユ (23.5.15)

ことから堺市民にとっては最も身近な川であり、この川の再生こそが多くの市民にとって有益であると考えている。しかし、つい最近までの水質状況や河川形態、地域住民の川に対する関心度の低さなどを考えると全国の諸河川の中でもアユには最も縁の遠い川でもあった。このような現状から、アユはあくまでシンボルと位置づけ、少しずつでもいいから河川環境を改善していこうという考えで進めてきた。ところが、平成 21 年に堺市環境保全部の定期調査で 1 個体ではあるがアユが見つかった。そして昨年（平成 22 年）の我々の調査では 9 個体を確認し、さらに今年もすでに 15 個体を確認している。夢が現実のものとなってきた。しかし、確認できているのは遡上期の稚アユだけであり、成魚や産卵行動さらに流下仔魚の確認はできていない。『アユの復活』ストーリーのスタートラインによく着いたところである。

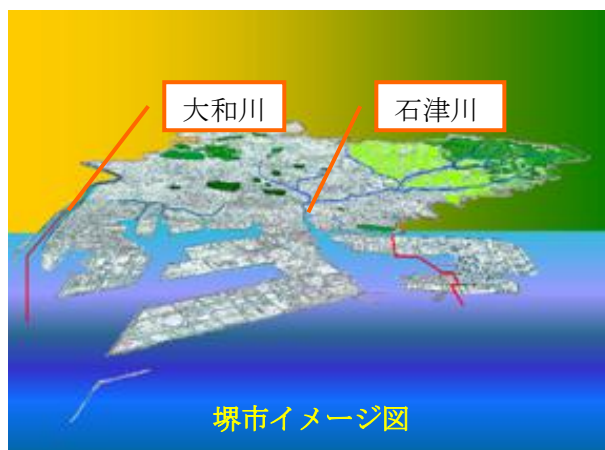


石津川 (我々の活動フィールド)

サケという魚をご存じであろうか。母川回帰性と言って生まれた川に帰ってくる性質がある。一方、アユは海で稚魚期を過ごした後、川を遡上することは

知られているが、生まれた川に確実に帰るといふ母川回帰性はない。大阪では、淀川と大和川で産卵行動や孵化した仔魚が海まで流下することが確認されている。つまり再生産がされているのである。昨年度の我々の調査結果からは、石津川に遡上したアユは淀川や大和川など他の川で生まれたものが、海を介して遡上してきた可能性が高いと考えている。

ところで、完璧な川の再生がなされたとしても、果たして石津川規模の河川にダイナミックな生活をおくる鮎の一生を保証するキャパシティーがあるのかは未知数である。しかし例えキャパシティーが無くても、人為的な操作なしで遡上しているのは事実であり、人



間に例えるならば人生を石津川にかけて自らの意思で遡上してきたのであるから、できるだけ長く生存できるような川づくりが我々の使命であろう。そのためには、今後は生息状況の詳細調査や水質の評価を踏まえ、堰の改善、産卵床の整備などを行うことで石津川が本来備えていた能力を回復させることが必要であろう。その結果は、アユだけではなく多くの生き物をも育むであろう。また前述のようにアユ復活については大河川での成功事例は複数あるが、中小河川ではそのような事例はあまり聞かれない。そこで、中小河川の未来を切り開くべき石津川を河川再生の道場と位置付けてはどうだろうか。

大和川のアユが取水停止から 26 年目、姿を消してからはもっと長きにしての復活であるように、『清流の復活』には長いスパンでの取り組みが必要であり、その間は地道な活動が求められる。また、民であれ、官であれ、どのような立場であろうとも一人の活動や一世代の活動では到底達成できない。継続性が必要であり、次の世代への引き継ぎが重要である。しかし、若い世代には、アユは清流のシンボルと言ってもピンとこない人も多くなっている。若い世代に関心を持ってもらうためには多摩川などの事例を紹介するなどして、夢を共有する必要がある。環境問題に関わらず最近の諸問題は短期間で解決できないものが多くなっている。その反面、現代社会は結果をすぐに求め、流行や価値観が短期間で変化する。長期間に渡って問題解決のためのモチベーションを持ち続けることは現代人には苦手な作業であるかもしれないが、地に足をつけて粘り強く進めないと前には進まない。その意味で『アユの復活』は単にアユという魚の復活だけでなく流域社会に計り知れない大きな恵みをもたらしてくれるであろうと確信する。

<参考 HP・資料>

- 市民ボランティアネットワーク「石津川に鮎を」<http://www.geocities.jp/ishizuayu/>
- 東京都島しょ農林水産総合センター<http://www.ifarc.metro.tokyo.jp/>
- アユ百万匹がかえってきた（いま多摩川でおきている奇跡） 田辺陽一著・小学館